



徐學淵恩日記  
三

又6  
5759  
3





又 6  
5759  
3

倭学戴恩日記卷第三

華頂殿侍倭学士平山甫与清稿

天保六年己未正月元日辛酉晴卯時  
不語即下ふまうて御前より由比満意  
難しき事ありし由比満意を二寸  
方許厚く書許し切て満意を清稿  
油を味を清くし器に書き物に清く  
暖酒を上手に清くし器に書き物に清く  
由比満意の故に故に清くし器に書き物に清く



高田早苗氏







内も思ふ中をよほすも己に〜檜木の住持  
山別をある月行事をてふ字をたすか  
はくく〜申のた〜山別  
まかぐぬ

うの清印は〜長原  
行はく〜山別  
山別を山別  
山別を山別  
山別を山別

文の林も業の〜  
三日晴は〜  
木地境を〜  
の武あ〜  
ふの〜  
ま〜  
ら〜  
は〜



しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん

しんせいのしんせいのしん



を名よるふかし又名よるおきて松の御厨下の上の  
河部屋へ入御し終る飛丸及小山に眼を  
江州東原新東寺の七なる古京内院を監  
物十人河部屋の外に改修子の此とも別度  
口より高家丸寺社より新なる河部屋の口  
より河部屋より増寺より古僧より下の河部  
屋よりあまの授えの僧外に修子の此とも  
後以小石門傳通後飯沼弘徳寺河部  
野原寺西久保三徳寺深川日長寺河部寺

本所雲山寺芝の河部よりあまの授えをとりあはしらが  
是のよけり終るはあまの河部後増修子の金智  
後河部あまの河部よりあまの河部河部  
己のよけり終るはあまの河部河部  
河部顔の御礼をとりあまの河部河部  
まの河部河部河部河部河部河部河部河部  
まの河部河部河部河部河部河部河部河部  
後河部河部河部河部河部河部河部河部  
河部河部河部河部河部河部河部河部



西丸上入河上はしるまのたけなほ

河原殿も帰河はるを待つ

河原も水地鏡温地はるまのたけなほ

うたよまのたけなほ

七日晴七石門は館とまのたけなほ

相と河原もまのたけなほのたけなほ

水地中山備後山部まのたけなほ

まのたけなほ和鶴屋平七たけなほ

たけなほ山部まのたけなほ

まのたけなほ

九日晴桃丸君治部は眼薬を常の情

治部大伴上人君山と連常上人たけなほ

たけなほまのたけなほ

まのたけなほ

十日晴まのたけなほ系殿まのたけなほ梅

梢旭日早常まのたけなほ

春日同詠梅梢旭日

早常聲優歌



平無清

志々雪は年欠の

瑞々字道とわ

吾々も想ふはわ

乃江春

小言極然よとてし 山海堂の汝

所取丸様

西の縁よふとてとてとてとて

言縁よふとてとてとてとて

尊酌よとてとてとてとてとて  
漆もとてとてとてとてとて  
矣のよとてとてとてとて

十五百晴語所新よとてとてとて  
本心鏡よとてとてとて

上野所新よとてとてとてとて  
るるるるるるるるるるるる  
まららららららららららら

十六日百水戸生館よとてとてとて



御膳 ぼんたよるめ

ナラ 膳水 侍臣 藤原 朝臣 藤原 朝臣  
相々 公の 御膳 ぼんたよるめ

よのちをさるるるるる

あゝのちのちよゝ入るる

るるまゝるるるるるるる

庭の 淡雪

和まののの

和春乃 ちよよるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる

ちよよるるるるるるる



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

子書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後

又後鳥羽後











あひつら学殿より一に明の御能興行を  
とらふべし

言子沙汰をきき候ふは御座りて本打を  
御城使高家若大澤修理大夫より

とまの心持をのぶ未の町に  
勅使并露寺大納言同長卿徳大寺

院使藤谷

を

と

官所同の上殿より一に御座りて

勅使兩卿 御座りて

勅命をのぶ未の町に

院使

院の御座りて

と

御門

院の御座りて

後沙汰をきき候ふは御座りて



子おさるころまうあし

三月朔日卯の町に御薬師の湯を  
おさるころまうあし御成門愛宕下虎  
の門内松田西丸下格使御如をさるころま  
おさるころまうあし余長上りころま  
おさるころまうあし

宮松の御廊下のいさぶねおさるころま  
少障子の北より丸九海小山法眼杏室近  
江守安藤雅樂香川柳長岡本帯刀池

内大臣西村左京ら好内膳余多田監物  
西川鞆肩横田助解由福谷司馬之原院  
湯屋 香川右近居流しころまおさる  
おさるころまうあし

大相國様の御座のた  
宮の沙汰あしころまおさるころま  
侍のた

勤使  
院使三卿のたあしころま







爲之者變而爲千山蔵して其代を禊  
せり又尋まふ汝も作後孤の狂言あり  
巴を鉄く懸りて汝も亦六段の狂言あり  
相衣を室剛ち夫をてしとくし海島  
きりしれを牛入とくし此間御進物者  
衆青骨二把づ持せしる其の首を頭  
上るとち七把あり乃ち之し一把あり  
文錢五貫文しとくし仲春をた一人  
ひて爲る事し其の御進物青骨丸廣事

時服一重靴載しとて數十人たてし  
世に散せし御室名ありちまふにあり  
やの時服を御春をん此春をててか  
はたのふはつきの御料金御進物し  
己汝もを汝の時服をのけし  
新金持あり世をのけし  
汝も御進物ありとて汝も御進物の  
御春をたしし汝も御進物あり御  
費二把に御進物あり



くらくらした口を言はせよとてはまじく  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては  
引之びつづる例をもとにせよとては

をうき橋はなすれども  
けしとち白門外枯槎沙門北はる名舞  
うらな鏡もさし過ぐらふ海をては能  
はるるまははれくくくくくくくくく  
り割るるる御もあはれはるるるる  
くくくくくくくくくくくくくくく  
をひて後御もあはれはるるるる  
この御もあはれはるるるる  
まじく言はせよとてはまじく



を流らなくおきめし錦を  
みゆる難やれ

いづれもあまのうら  
せ日あゆみ無くはるまじ  
花續春村つゆ中満前疑織錦  
遊宮貴人同未の時つるは  
ふまのうら

五、法華傳法院よりおぼ  
れし法華寺地内の小寺を  
宗女が

宮の御出せしもの  
少やゆきあはるる  
いづれもあまのうら  
を流らなくおきめし錦を

東廠准后宮

新宮ともいふ  
場を西向し  
柱をさし  
江を  
を流らなくおきめし錦を



















さきしつはあししつに  
柳を渡りて内なるを  
みくしつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに

しつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに

了橋門雅子橋北通、飯田町堀留石川  
門しつはあししつに  
水戸坂を渡りてしつはあししつに  
さきしつはあししつに

宰相後孫鳥帽子将衣を  
迎ひしつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに  
しつはあししつに











Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.



















○あつた石川御座候の御座候  
御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候

御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候

御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候

御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候

御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候

御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候  
御座候御座候御座候御座候











海〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

御事書

補正成の事

〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

十七。御事書

海〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

再読書

ヨリ

補正成の事

〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

少る事

〜ヨリ〜ヨリ〜ヨリ

友とらき

御事書

御事書

御事書

御事書



















小石川御館

此明ら指し四半休の幅言上にてハ筋、幅下申し但し一首  
懐紙ノ言ニテ三首以上ノ懐紙ニテハ別所ニ結ヘヨセテ  
授ク仕ル

歌冠  
一字下

詠秋懐舊三首

倭歌

宰相□□  
此字  
下

秋  
歌

一行三句

一行二句

秋  
歌

一行二句

Vertical lines of text on the left page, mostly illegible due to fading and bleed-through.



一  
獨作は始の同篇を尋ねては、  
此の抄を依り幅も少く、但し、  
首尾の定まりを、上へ始  
て、後い端より、  
懐紙も、  
間敷一行の幅、  
御深筆の後、  
端作書事懐紙、  
行作と、

一  
楷書も書に懐紙、  
御名書も、  
その真中の行、  
懐紙、  
まづ、  
の下の、



此の歌の音のなまよひもよまがら  
ゆづきまづき

一 歌の二句つゆみる行一句は行合  
ア二句すはく重々續續の書  
法のやうに二句も又上句の句の  
二句もはくすゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なまよひや熟辭をゆゑにうまをま  
つてまゝなまよひをいへるゝゝゝゝ  
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
熟辭をいへるゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 昔事懐紙の歌の冠を平と揃へ  
背を不同に信つゝも懐紙の事の時  
背つ冠も平と揃へはるゝゝゝゝ  
六分はるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
上三寸はるゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



後の事と上下の同の法は  
・ 新紙、高檀紙と御用と  
一尺三寸幅を定むるに  
恰好斟酌

仕立

右標紙式、曩時尊後作法目録標紙夜  
新抄及古書古字讀由据と斟酌の  
故実と志述信り中より  
人乙

高麗、備りあり矣

天保六年七月廿日

平与清澄識

廿四日御用入興津正江邊より奉書あり

以上帑政徳上札と少進  
有るに於て廿四日  
少石川清澄下札仕立  
迄

七月廿四日

少石川清澄

興津正江邊



廿五日辰のす別をうり深帷子麻下をえり  
る

御座りませうと申すに聞かざりしは  
あつたに違はぬと申すに  
付しは御座りませうと申すに遠山籠今興付  
おはせり石田隈迄申別をうり一月掛を  
御座りませうと申すに書取

廿六日持書

お入り

御座りませうと申すに御座りませうと申すに  
お入りませうと申すに

廿六日申石川

御座りませうと申すに御座りませうと申すに  
うた

天候のよきと申すに御座りませうと申すに  
お入りませうと申すに御座りませうと申すに  
は御座りませうと申すに御座りませうと申すに



Handwritten text in cursive script, likely a signature or name, located at the top of the right page.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a specific reference, located in the middle of the right page.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or title, located at the bottom of the right page.

Main body of handwritten text in cursive script on the left page, consisting of several lines of characters.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, located at the bottom of the left page.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, located at the bottom of the left page.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, located at the bottom of the left page.



天保六の年三月

三日

大樹木の作

流の西庭

もあ

油の庫

天保七の年三月

流の西庭

もあ

一

ち樹木の作

まうり

幕下の

石坂

宗哲

雨

面

わ



うきとほりてはる

釣くはるの南をりて玉

あはれも別とるもてはる

おきし時同し法をの

押臨亭と法をの

あ村あまるとはる

たはる

九九増増あまるとはるのあまるとはる

うきよきのあまるとはる

おきし時同し法をの

釣後とてはる

ほりてはる

あはれも別とるもてはる

内府志のあまるとはる

あはれも別とるもてはる

侍

釣のあまるとはる

あはれも別とるもてはる



むすむす同しはる  
よきよきよきよきよ  
あつあつあつあつあつ  
綱引の業はよきよき  
了  
幕府の厚き山恵  
のすくすくすくすくす  
納付の厚き山恵

あつあつあつあつあつ  
よきよきよきよきよ  
あつあつあつあつあつ  
綱引の業はよきよき  
了  
幕府の厚き山恵  
のすくすくすくすくす  
納付の厚き山恵



茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く

茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く  
茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く

茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く  
茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く  
茶一葉用一匙の  
湯の湯を茶とて  
飲むに味は苦  
くはなからず  
味は清く











房州のあまのり  
おのり  
おのり  
おのり

おのり  
おのり  
おのり

おのり

おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり

おのり  
おのり  
おのり

おのり  
おのり  
おのり

おのり

おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり  
おのり















俳諧やうの地をいふにさういふ  
奥は妙なるをいふは

口をゆるぎしむりの飯をいふは

あまのこをいふはさういふは

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは

おはす

廿九あまのこ

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは  
おはすはあまのこをいふは  
おはすはあまのこをいふは

廿十あまのこ

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは

おはすはあまのこをいふは



いつい信女の家へお入りなす  
油の縁に油をいれしを極へ

廿一様子海へ

山泊をほりていそいで

はやくとていそいでいそいで

いそいでいそいでいそいで

廿二様の海へ

いそいでいそいでいそいで

いそいでいそいでいそいで

廿三様の海へ

いそいでいそいでいそいで

いそいでいそいでいそいで

天磨の代りなすの書へいそいで

いそいでいそいでいそいで

廿四様の海へ

いそいでいそいでいそいで

いそいでいそいでいそいで

いそいでいそいでいそいで



さし子代もいふやうに  
まねやうに可いもの  
し中一清くさうに  
みもあつたやうに  
うねうね

オオ海路

海路はうらやうに  
し海路もあつたやうに  
あつたやうに

うらやうに  
うらやうに  
うらやうに

オオ海路

うらやうに  
うらやうに  
うらやうに  
うらやうに  
うらやうに



月十七日 秋懐草

少頃をわくわくする存

遠くをのぞくかたはら

くつ 秋懐草の心

又連山如波濤をく

るや ちのちのく

く 秋懐草の心

戸の縁をく

御深草中 流るる

あつたつた

流るる

く

九月二日 加藤傳九郎

御深草中

秋懐草

あつたつた

あつたつた

秋懐草の心











九月七日 晴 友定殿より進法寺へ  
しるし

字御深なる事と申すに  
御天の心も  
この心も

十二月八日 晴 友定殿より進法寺へ  
おと原様の心も

牛柿

三十一日 晴 友定殿より進法寺へ  
しるし

九月十日 晴 友定殿より進法寺へ  
しるし

月前梅

九月十一日 晴 友定殿より進法寺へ

咲梅の梢も

九月十二日 晴 友定殿より進法寺へ

月影も

梅の花も

しるし

萬葉







か

廿三日の孫傳九の... (vertical text)

結中

星村の... (vertical text)

色... (vertical text)

七十七... (vertical text)

と... (vertical text)

は... (vertical text)

い... (vertical text)

相衣... (vertical text)

か... (vertical text)

か... (vertical text)

湯... (vertical text)

い... (vertical text)

け... (vertical text)

海... (vertical text)

は... (vertical text)

は... (vertical text)



御書  
御書  
御書  
御書

天保七年二月廿九日  
少石川邊陸軍の侍  
臣の御書  
御書

日守前大細  
御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書



のまゝに御早の白紙に書きて又御信を  
御書付申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候

三月朔日京都

御殿より沙汰と松室迄行り作の事を以て

以湯物あり

二日茶齋助もて申上り候へども御書付申上り候  
注秋系進持もて申上り候へども御書付申上り候  
新志守もて申上り候へども御書付申上り候  
一由もて申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候  
御書付申上り候へども御書付申上り候

九日扶桑拾葉集の注秋の事候へども御書付申上り候  
之度々新志守と七戸曰銀次郎兼同虎と申上り候



汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集

汝東抄業集







百江海濱名彦藤田虎之助在江都山女座  
書取之し事し己上

三月

中山将書

移活平七様

戸田銀治郎様

下札  
登館自教在壇之時  
以或此言を以て入る事  
多し其子存也

藤田虎之助友部山女座  
今市村宗四郎様  
多し其子存也  
跋文を  
以て

夫大臣之不言者，雖如情然，其實恐失  
祿也。小臣之不言者，雖似諛，其實  
恐得罪也。是以上下道塞而天淵懸  
絕，故卑賤處職者，賄賂可以使之  
富貴，當路者，巧言可以欺之，賄賂巧



言文行而民之怒惟厚君之德惟薄豈可不  
不歎哉儒流之教喻每通識而被嗤於俗  
吏僧道之濟度有偏宗而所轄於檀越  
則可謂矣不足救其弊風矣嗚呼昇平  
而財用不足治世而異法難禁古今通患  
也救之有說若用其術金銀充於天府梁  
穀溢於郡倉也必矣所謂隨諸侯之心而  
使富之則可備不虞一也隨人臣之心而使  
安處之則可盡忠施憐二也隨民之心而使  
有

之則命令可行三也隨水之心而治河渠則費用  
可省四也隨地之利而教種藝則產物可納  
五也隨商賈之心而使通利則四方可使六也  
此是六術在於通古今上下而行之仲尼曰不  
在其位不謀其政雖然溥天之下率土之濱  
莫非王臣則不能不若於好問之君也友人  
市村昌信有觀於此最長治水拯民之術  
而厚於忠誠其努力之志確乎不可拔也  
頃在逆旅寄一小冊子於余茅廬余讀







しんていとうてい

昔、この山に石鏡ありて、

山に石鏡ありて

胃廿六日史館に記す、  
常陸風土記、久慈郡の事、  
内里本名古々之邑、  
集覽見鏡、則自去。  
俗云、夜鬼  
向鏡自滅

鏡石、石鏡とも仙く鏡とも、  
月鏡とも、昭鏡とも、  
述異記、王子年拾遺記、  
杜詩、初学、  
州志、  
明鏡、  
崖石、

高嶋清美、  
少将の海、  
石川清屋、  
大廊下、  
午の祝、











倭學所

倭書編集所

乃云云云云倭書の字面朝野群載  
云云云云

四日云云取云云倭書編集所と稱  
云云云云の心細を云云九日  
囊と挿菊花云云故事云云  
云云云云の作云云通云云

西宮記五月部五日条云云所献藥王

二流蔵人取之結舟畫御座母屋南北柱概  
莫囊改著彼所儲料云云

同書九月部九日条云云御帳左右付菜  
蔓御前立菊瓶有臺

北山抄九月九日節會条云云尚御帳之母屋左右  
柱以縫囊盛菜蔓向外著之去柱貫一尺餘  
許以金瓶挿菊花并置黑漆机以組結者  
各置菜蔓柱下云云

小野宮年中行事九月九日節會条云云







延喜中

延喜中整式九月九日製吳茱萸料緋帛

一疋緋絲二約皇后宮云

同典藥式凡九月九日吳茱萸廿把附藥

司供之云々

枕草紙春曙抄之卷四下九月九日の菊

をあやとよしれまふつとよまふとよ

やうらうらゆひはく月比あさきま

こころくすたはあれ云々

荆楚歲時記下九月九日四民並藉野飲宴按杜

公瞻云九月九日宴會未知起於何代然自漢王

宋未改今北人亦重此節佩茱萸食餌飲菊

花酒之令人長壽近代皆宴設於臺榭又

續齊階記云汝南桓景漢費長房遊學長房

謂之曰九月九日汝南當有大災凡令家人縫

囊盛茱萸繫臂上登山飲菊花酒此禍

可消景如言與家登山夕還見鷄犬牛

羊一時暴死長房聞之曰此可代也今世人



九日登高飲酒婦人帶茱萸囊蓋始於此  
古今秋下よれしよみかゝる家の名は  
紀友則

高き山を登りて酒を飲む  
秋の心はさびしき  
菊の花はあはれ  
秋の風は白く吹く  
さびしき秋

後援 女八の酒之良のみを為す

早の雪 待たぬはりの花を  
原原伊衛

より酒のちかすれぬ白菊は  
はな

海氏物語紅葉 湖月亭 青海波の  
七  
おは  
は  
ん



河海抄紅葉字菊御願事 後撰云女八のふ  
こ元良れはまよふこや 甲子 御願事  
菊もをひきし 参議は保御御願事

美代の子やまをぬきし御願事

いしりやひきし御願事

治安二年十月十三日御願事中興

御願事

不承りし御願事

十六年十月九日御願事 女房備前菊花盛

開此夕更衣命婦蔵人亦相集頗設小宴大  
宰相親王命侍臣男如房令奉霜中  
菊花和歌以女装束賜親王以下六位坐  
有差之臨朋左衛門督折菊花奉御願事  
不承是上御願事 乙卯年 丙申 中行事  
十六日法皇御願事 九月九日  
御願事

六の登館 乙卯年 乙卯 御願事  
倭文編集の











八日 琴の音はきこえて

十一日 久米彦助まで来て 今日哉 田源助渡邊  
富之進二人 倭書編集所 別書も補うて  
しつゝもゆふ

十二日 御家老 鴉原平七 若光 戸田銀次郎  
沙吟味 後藤白虎に助をいっせいに  
編集の命をいっせいにいっせいにいっせいに  
左のど

倭書編集所用

御家老の存後  
沙吟

山向将書

十月八日 柴田源助 渡邊富之進 せしむ  
和書編集所 閑字のしつゝもゆふ 其消息  
文云

いふ紙致物と云遊り 寒冷れぬふ  
富之進のしつゝもゆふ 其消息  
以後十、沙吟集に記す















編集してある翻譯しての文  
抄をよ

河本 *Yoshitaka* の *Yoshitaka* の *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* 十  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
利和 *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
七年の十月 *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*

九章 *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*

新編書 *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
通 *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* 補  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*  
*Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka* *Yoshitaka*







根の政養

とよき釣のふの根川  
せしむるを

松山高宣

しるし文好む中  
しるしを

中川裕臣

のくすぬみ  
いふみ

橋平俊

はらわたり  
はらわたり

西段宣明

玉の  
浪逆の浦

久末持高

那珂川の海  
わし海



中山田占清

荒波上るるをいふはよきこと

目も心もいふはよきこと

相公殿様編集所へはよきこと

書きたるはよきこと

これほどはよきこと

得るはよきこと

よきこと

大波の上るるをいふはよきこと

よきこと

よきこと

よきこと

よきこと

よきこと

十二日編集所へはよきこと

源力郎根も新へはよきこと

編集所へ

十六日編集所へはよきこと























貞信公の御遺集は、  
口傳の御遺集は、  
一巻あり

未だその御遺集は、  
御遺集は、

拾遺集卷十、雜賀、冷泉院の御遺集、  
御遺集は、  
御遺集は、  
御遺集は、

為平乃女は、

御遺集は、  
御遺集は、  
御遺集は、  
御遺集は、

御遺集は、  
御遺集は、

後拾遺集卷七、賀部、



あまのついでにうらやまのついでに  
うらやまのついでにうらやまのついでに

うらやまのついでにうらやまのついでに

うらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

あまのついでにうらやまのついでに

あまのついでに

新和撰集 七 賀部 十 天啓 三 時 二 中御 三 社 二 中

うらやまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

清原元輔集 十 延喜御屋風伊勢御息所

清原元輔集 十 延喜御屋風伊勢御息所

あまのついでに

あまのついでに

今昔物語 卷 延喜御屋風伊勢御息所

讀 和歌 今昔延喜天皇御子宮御著

袴ノ時 三 伊屋風ヲ為リテ 給テ其色。。







平家物語四卷 丁 嚴島御幸 丁 治承四年  
正月廿日 春宮御袴着并御摩那始上テ  
日出度事云有シ云々

按源平盛衰記十二卷 丑 主上鳥羽御籠居  
御歎事 丁 廿日 春宮御袴着御  
十始可聞百トテ花マカテ御事共世間  
二六旬リヒソメキケレ共と云々 百練抄卷  
丑 治承四年正月廿日 春宮御袴着

内裏有莫味著袴事云々 安徳天皇

三歳十 丁 本朝文粹十二卷 丑 九 丁 左 戸部尚書齊信後  
一條院傳時女一宮御著袴翼日宴和歌序也

扶桑略記白河院承保二年八月十六日 春  
東宮有御著袴事 生年五歳公卿皆奉

九曆天徳元年十月廿五日 春 宮雄著袴事云



台記康治二年十二月八日条、菅蒲九歳著袴、今度度依永保三年入道殿康和是余庶長也、四年攝政殿等例所行也

玉海永安二七五条、此日子童有著袴事、宗家卿著紫束下官结腰、其次弟先下袴、次衣、次直衣、口尻如束帶著也、訖、兩人退、了、次供前物、

同書永安三三〇条、此日乙童著袴、自高陽院賜紫束御使判官代有陸持、持

按著袴乃次年八歳著袴の例を云ふの玉海の文を記す

和長記延徳四二八条、今日聊有祝事、三歳少男髪置也、自藤中室家、予伯被送水予仍此次送著袴之祝、自御局同被送绵帽子、烏丸、此祝事送賜一荷之種、所以恩惠且成壽福之感也、取所

按髪置者袴同所、三歳少男髪置祝、绵帽子を冠り也



昔より上りたる白髪と留る根松数相子と  
上りてくし食膳ハ金頭真無少少を道  
吹かすかしく流とほくもや一尾川道祐が日  
次紀事井沢長秀がはらへ一卒たもく  
とのゆ

康富記宝徳元二十二年太子子懸毫君之  
髪置袴着之祝也

指髪置と重髪とをいふは台記康治  
二十二年一午刻今九<sub>局薄九</sub>重髪<sub>也余無子</sub>

也之とあると云ふはこれハ一午刻也  
男めききとて肩とくくそ切りしり萬  
葉十年の心歳と切髪の時も侍階切語  
とくくくく振分髪も肩退ぬと  
とくくくく

管見記永享二正廿二条武家若公歳深  
髪並着袴也祝着之義有之と  
此足利義教將軍の若君五歳少く  
着袴しとて海をさしとてけ尼の



後の...  
岷江入楚...  
薄雲の巻...

拾芳抄下事卷

禱諸事吉日部  
加冠帶吉日

腋着  
甲子 丙寅 丁卯 乙卯 丙子 壬午 己巳 癸酉  
禱也  
甲戌 甲午 癸卯 戊子 辛卯 癸巳 庚戌

己亥 甲辰 癸亥 乙巳 己酉 丙辰 辛亥 丑日  
壬子 甲寅 乙卯 丁巳

不冠帶不歸故郷又失兄弟幸不上頭

今按帰忌往止道虚悔八龍七鳥九

虎六蛇伐日等忌之

海ノハ...

惡日と云々四季の誤之蓋盤内傳

四季惡日世系春  
甲子 乙亥 八龍日

夏 丙子 七鳥日 秋 庚子 九虎日 冬 壬子 六蛇日

右今所明四季惡日者箕經所述八難

七陽九厄六害業也

海人藻荻下卷

下祝酒肴必三献ト云々如何ニ時刻延

サルヤウニ取沙汰スル也凡酒無量不及礼



世俗淺深秘抄七卷

群書類後序 卅五丁右

七十五段

著袴一度兩足指入也之同下卷既百卅五段

東宮著袴裝束之中者稱是讀様人

不分明但或說曰夕乃秘事歟

厨事類記調備部

群書類後序 卅三丁左

裏書

養曆四年十月皇子御著袴所膳候其

曜汁汁實盛鯛太以違例也須供鯛

翰之又卅四丁右大治六年四宮御著袴之

時第三御盤居御酒盞不進汁湯器

寶積類書卅八卷私事部御著袴常富家

御著袴之著袴之差別儀一度之兩足之指入

ナリ袴ヲ取寄テ穴ヲアケテ指モトシクメシ

テ是ヲサレ入ル也

按之度之兩足之指入事ハ世俗淺深抄

と同説

按著袴のよりお門出し後より少

推量す其時節定ま事ハ

四季法例ハ十一月十五日を專とす







ふしとあつて一箱を以て中比よりいふに  
まじりてあつて事いふにいふに  
ふしとあつて後より字をよみてヤツコと  
事いふに

著袴者、松屋外集中の流し

いふに抄切りていふに 平清彦上

廿七日今日

襦子代磨甲の御著袴の流し

流しとあつて

久まじりていふに

いふにいふにいふに

いふにいふに

三月朔日京都

吉水の内所よりあつて

宮の内所よりいふに

新のいふにいふに

同沙錐をいふに



二日和書編集所...

相公殿様より御...

〜〜〜家より〜〜後沙洲西門入

戸田銀次郎より〜〜

おとよの波のいふ事明の事

と侍の事〜〜

三月三日 戸田銀次郎

七十四日持書後

之日少石川御屋形より〜〜御内命  
候し〜〜御内命  
此趣を傳へるは〜〜

五日少石川御屋形より〜〜銀次郎

〜〜御内命

〜〜

左右衛門佐 相當後五位上

左右近衛府左右衛門前左右兵衛前六衛府下



申候ヲ大内護衛ノ官ニ人近衛府ニ大将ヲ長官ト  
シ中將少將ヲ次官トシ其ニ下將監將曹府生  
番長ナド候テ近衛ヲ率升守衛任ハ近衛  
諸國ヨリ歟ム衛士ヲ近衛衛門ニ清防人  
ト四部ニ分テ候内ノ一部ノ名ニテ人惣名  
ハ清士ニテ人ハ清ツ去清ナドガ夜番ノ  
時炬人火ヲ歌ニ沙垣ヲ衛士ノタラ火トモ  
添テ人熱テモ衛府ハ内重ト申テ持裏  
ノ内ケルワラ守リ人兵衛府ハ中重ト申テ

ニケルワラ守人清防外重ト申候テ三ツク  
ルワラ守人イツレモ左右人ハ六衛府ナリ申  
此内近衛第一重クテ大将ハ相當後之位  
中將ハ後四位下少將ハ五位下ニテ人衛  
門府其源ニテ督ハ後四位下作ハ後五位上ニ  
テ人玄清府又其次ニテ人長督佐トモ衛門  
府同位人拙人ハ左右衛門佐ノお高ハ後五位  
上ニテ人お高佐同位人ハ中衛門佐  
方蘇ニテ人



左若兵衛佐 古者後五位上

右若清門佐因孫人ハ此ニ居ル方次ニ成ル

常陸女 相當後五位上

上総常陸上野ノ親王ノ御任國ニテ此ニ國守  
ノミダイロユ大守ト申ルダイロユ當時國守ヲ大守ト申ルハ  
唐名ニテノ刺史使君トモ申ル然テ親王  
ノ御任國ニテハカミト稱ルテ源氏物語  
トドノ類スベテ物語書ニハヤガテカミト書  
テノイナ位古ハ上総常陸上野ノ公ヲニテト

申テノイナ後ニハ三浦ノ千葉ノ秋田城分  
ヲ之イナト申ルニ浦分ハお後分ガ之浦ニ  
居住ル邊ニ地名ヲ得ルハ有名ニ云々ニ國  
分ノ任ヲ勤ムニテハ十クノ千葉分モ同様名  
目ニテノ秋田城分ハ出陣分ガ秋田城分  
夷寇ヲ拒守ルル故也唱ル秋田ニトイナ斷  
田トモ飽田トモ書キ云々トテテテテテ  
ツレニ且ニ秋田城分ヲカイダキンスケト  
讀ム故實ノ境無文知ルルテアキ



タヤラスケナド、リムハ物天ノ沙流ノ物  
弗陸ハ左衛門ノハ父ノ相者止六位下ノハ左衛  
王ノ任國ハ父カヤカテ守リ多ク候之ニ後五位上  
ノ候當時

御三家様 御世子

尾州様ニ在兵衛佐

紀州様ニ在常陸父

水戸様ニ在衛門佐ト申御名存也

候事

神祖ノ尊慮ノ由兼奉ノ旨書籍類ニハ  
未見出申人友人行尾善筑申人ハ兵衛佐  
ト申人ハ録倉ノ右幕下モトカモ兵衛佐  
ニ上ノ義状常陸今ト申人ハ  
紀州様最初常陸水戸ニ封セラレ玉ヘハ故状  
在衛門督ハ

水戸御始封

威公様ノ御養母太田氏ニテソノ先祖  
右田左衛門大夫持資江ノ城主トシテ



等ノ以テ意モ人ノ在

御名

公儀ノ御議定事身見之人事ニ不承傳ト  
申ノ然レモ縁念<sup>イタラ</sup>者<sup>イタラ</sup>古<sup>イタラ</sup>儀<sup>イタラ</sup>依

尾列様御世子ハ在兵衛佐ト申シモハ

右右ノ文ガコト明ク

紀列様御世子常陸分ト申シモハ

ノ御封國之立事ヲお違カレバラズ

水戸様御世子左衛門佐ト申シモハ

田左衛門大夫持資ニ取付ノ親身又佐ト夫  
ハ孫列ノハ如何ヤノラシキコト

御名

此様ノ御事御思慮事モ候テ被仰出

事ト推量ニ奉ラレハ係ラ何レモ從位

上御位ニテサセル甲乙ハノ事ト官職

ノカニツキテ申ノハ在兵衛佐在兵衛佐

常陸分ト申ス順次ノサレト常陸御封

國ニテ常陸分ト申ス事トシテハ











要序子好角

守の昔

子好角

私

今夜抄

思上之心中

守の昔

加筆抄

武家

中抄

口

天保七年三月廿

後

系

筆

内

和書

後抄

言

身

和



中山指書

三月廿七日御形紫田原分海を言ふ進作を伝て  
白銀之枚御鏡裏の葉を御代海へ巻か枚  
より御傳へし又慈石の礎を具し御傳へ  
こゝに紫葉集の御指しとある御傳へ  
し

高田編集の御傳へし編集の書三巻御傳へし  
とある御傳へし御傳へし御傳へし御傳へし  
御傳へし御傳へし御傳へし御傳へし



